



国境なき医師団報告書

2003年2月

チェチェン・インギーシ

～援助を拒まれ弱い立場に置かれた難民たち～

目次

1. はじめに ～チェチエンの深刻な人道状況～	P3
2. 最低限に控えられた援助	P4
3. 新しい難民登録の拒否	P9
4. チェチエン: 柵のない牢獄査	P14
5. おわりに	P19
6. [付録]チェチエン、イングーシにおける国境なき医師団の活動	P20

1.はじめに

国境なき医師団(MSF)は2000年11月、欧州議会の議員会議上でチェチエンの深刻な人道状況を訴える証言を行いました。1999年のチェチエン戦争再開後、恐怖政治が行われてきたせいで一般市民が必要な医療にアクセスすることが難しくなっているという状況をあげ、ロシア当局およびロシアのこの政策を支持する各国政府を非難したのです。現地MSF職員の聞き取りをベースにしたこの証言では、チェチエン市民に対する当局の不当な処遇や暴力が明らかにされています。



今日チェチエン領内で人道援助を行うのはこれまでもなく難しくなっています。援助団体職員には身の危険が高まっていますし、活動を阻む障害は増え続けているからです。チェチエンの一般市民たちは、生死を脅かされ、母国には援助も得られぬと、隣接国であるイングーシへおびたしい数で逃れ続けています。本国にはどうしても悲惨な状況に置かれてしまうからです。

- ・ 母国に残っているチェチエン人は日々不当な規則や暴力に脅かされています。彼らの暮らしは牢獄同然の環境にあり、政治上の恐怖時代を生きています。しかしこの2年の間、チェチエンで日常的に行われる大規模な人権侵害や国際人道法に反する行為について国際的な調査が行われることはありませんでした。
- ・ チェチエン紛争が3年目に突入した現在、チェチエンからはますますおびたしい数の民間人が戦禍を逃れようとイングーシへやって来ています。しかし「密入国」者であるこの新しいチェチエン人たちは難民としての正式登録が受けられません。そのため2~5万人の難民が正式に登録されずじまいになっています。
- ・ またそうこうしてイングーシにたどりついたチェチエン難民の住まいはというと、不潔で惨めな状況に置かれており、その悲惨なありさまはロシア当局にさえ認められているほどです。また、チェチエン人たちは援助が不足したり、脅されたりという目にも遭っていますが、これはやっかい者の難民たちを自国へ帰還させようと恣意的に行われているものです。国際難民法によれば、難民が自国へ帰還するのは、本国の帰還体勢が整い、難民が自分で帰還すると決めた場合のみとなっている。MSFはこの点を指摘しておきたいと思います。

なお、この報告はイングーシ共和国でチェチエン難民の援助活動にあたっているMSFスタッフの証言と、MSFの援助を受けている難民への調査をもとにしています。

2.最低限に控えられた援助

公式筋によれば、イングーシ共和国、グルジア共和国、ダゲスタン共和国へ流入したチェチェン人の数はおよそ20万人といわれています。しかし難民の登録が中止された2001年の春以降もチェチェン人の流出は続いており、これ以降の難民登録数は正式にわからなくなっているため、公式とされている数字ですら、登録中止以降の難民数が含まれているのか、また新生児が含まれているのかは不明です。イングーシで難民の診療や医療施設の再建にあたっている国境なき医師団(MSF)スタッフは、日常業務の中で難民たちが被る悲惨な状況を目の当たりにしてきました。難民の大多数は、そうした状況にもあえて口をつぐんでいます。

■悲惨な生活状況

不潔な地下室には明りも通気孔也没有。農場におかれた窓のない小さな家では数家族がおしあいへしあい暮しています。民間の個人から家を借りるのは高くつきます。テントは雨漏りします。イングーシで3度目の冬を迎えるチェチェン人たちは、このような悲惨な状況でたびたび体をこわしながら、なんとか生き延びています。

今でも金銭的に余裕のあるチェチェン人は個人から部屋を借りたり、イングーシの親戚のもとで暮らしてしています。その一方、住まいを持つことができない者はテントでキャンプ生活をし、それもできない者は公共の建物内に不法で住むことを余儀なくされています。

・ 人々がもっとも不潔な暮らしを余儀なくされている隠れ家、「無断定住地」

難民が無断で住んでいる建物はいたる所で見られます。廃虚となった工場、操業中の工場、稼働中またはすでに廃棄された計画経済農場、倉庫、誰もいない校舎、地下室、小屋などに4万人を超える人々が暮していますが、それを正式に公表した数字はありません。またこうした場所の調査は正式なものではなく、すべてをカバーしていません。こうした無断定住地では難民がもっとも困難な状況に置かれています。ねずみやゴキブリにさいなまれながら、暖房施設や通気孔もないまま1000名に及ぶ難民が住んでいる建物もあり、人間が住むにはふさわしくない場所であるのは明らかです。こうした無断定住地に住む難民のもとには、たびたびNGO団体が視察に訪れています。しかし生きていくのに欠かせない水や衛生必需品の支給、また寒さや雨から身を守るための援助にはつながっていません。MSFではこの1年にわたり、「地下室」など不衛生な住居に暮らす家族を外へ出す、小さな避難場所を建設して彼らを住まわせる、自分たちで避難場所を作った家族への防寒材の支給、適切な衛生施設の支給(トイレやシャワーの建設、配水設備の建設など)といった優先事項の実現を目指してきました。しかしこの活動は充分に行えているとはとても言えません。イングーシでMSFが行った調査によれば、こうした状況に置かれた難民の55%が住居に雨漏りや壁の穴といった問題を抱え、大部分の地域でガスが止められていました。イングーシに厳しい寒さが訪れれば、人々の健康や生命が脅かされること

は確実です。

・ 難民キャンプ

キャンプにはおよそ 3 万の難民が生活していますが、使われているテントは古く、人がひしめいていません。特に問題なのは、既にボロボロになったテントが多いことです。これでは寒さや雨をしのぐことができません。人も多く、20 名用のテントに時に 2 倍、3 倍もの人間が収容されています。衛生状況も劣悪です。簡易トイレがじゅうぶんないため、今あるトイレの多くが汚物で埋まって使い物になりません。飲料水の入手も困難で、それにも人の多さが問題となっています。MSF は難民たちのこうした状況をこれまでくまなく記録してきました。MSF が 70 カ所で 440 家族を対象に行った調査によると、雨や雪、冷たい風にさらされたせいで穴が開いたり、破れたままになっているテントは 8 割を超えています。また難民が集まって生活している場では、テントや公的建物など、使用できる衛生施設の不足が深刻化しています。20 人を超える難民にトイレ 1 つといった難民が 8 割を超え、そのうち 2 割は 1 つのトイレが 100 人以上で使われています。中には、200 人にトイレが一つ以下というような場所もあります。シャワーについては、集団生活を行っている難民の大半が 200 人以上で 1 つを共有している状況です。

・ イングーシには民間の個人から部屋を借りているチェチェン人が 8 万～10 万人います

部屋を借りる難民にとって、地元の人間に比べて高額な家賃はしばしば悩みの種です。また友人や家族のもとで仮住まいをしている難民もいます。しかしこうした人々は、家賃を払い続けられたり、あるいは同居人の善意が消えてなくならないうちは、他の難民に比べ全体的に恵まれた状況にあります。MSF が行ったある調査によれば、イングーシに来てからこれまでに民間で住宅を借りたことのある難民のうち、半数以上が家賃滞納のために少なくとも一度家を移っていることが明らかになっています。家を追い出された時点でホームレス化することもままあり、無断定住地に居場所を探すことを余儀なくされます。冬の到来と共にガス代や電気代がかかさんでいき、イングーシの難民がそれを払えないために部屋を追われる傾向(有無をいわず立ち退きを求められる場合もある)が徐々に高まりつつあります。

・ 居住面積

こうした問題に加え、半数を超える難民が 1 人あたり 3 m²のスペースしか持っていません。しかし難民や刑務所における収監者を見ても、国際基準では 3.5～4.5 m²のスペースを確保できるのが当たり前となっています。

避難所での証言

・コウダーロゴバズキャンプ:「狭いので交替で寝ています」

ナズラン市の中心地にありながらまったく人目につかないロゴバズキャンプは、市場のスペースを利用して開設されています。16 の軍用テントが空地にたてられ、その周りを 200 の小屋が囲んでいます。こ

のキャンプには 1870 名の人間がおびたしい数のネズミ類、ゴキブリ、犬、猫と同居しています。コウダは 7×8m サイズのテントの中を案内してくれました。中には 5 つの家族が合計 45 人で住んでおり、そのうち子ども 13 人が半分のスペースを占領していました。うち 1 つの家族には障害のある子どもが 2 人います。寝台と台所の間には 50 cmしか隙間がなく、子どもたちがよくやけどをしています。

テントは事実上、共同式の寝室と化しており、住人は交替で寝ています。男たちは夜の間、テントの片隅に腰掛け、煙草を吸って朝が来るのを待ち、日が登って子どもが学校へ、女たちが市場へと出かけると、その間に数時間眠れるというわけです。テントはもう崩れかけています。破れた部分は住人たちが段ボールや毛布を使って可能な限り保護しています。しかし努力もむなしく、雨が降ればテント内側に水が染み出してきます。中はじめじめして寒く、犬や猫が入口からでなくテントの隙間から入ってくるし、巨大なゴキブリがうようよしています。外にはガスパイプが地面にむき出しのまま敷かれていて、ヒューヒューと気になる音を立てています。

「私たちが欲しいのは、テントをいくつか、または小屋を建てるための建材だけです。この場所の人の混み具合はものすごいですからね。それをましにしたいだけです。ここ 2 年間に子どもたちも成長しますし、新しく生まれた赤ちゃんもあります。だめになったテントは交換したいです。崩れかけたテントに犬や猫が好き勝手に出入りしますから。UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)は半分のテントを取り替える予定だと言っていました。それが前回の会合の時は『自分で直してくれ』と言われました。夏の時期には、みなテントを裏返しにして乾かしています。でも今は雨がよく降るし寒いです。雨が降るとキャンプは水浸しになるんで、砂利を敷かなきゃならないんです。」

・アレク(37 歳)ーボガティール:1 人に 1 つの毛布もない

「どうやって暮しているかですか？ 壁にかかっているあの上着、あれが我が家の枕です。シーツは持っていません。毛布も 1 人に 1 つはありません。近くの住人が娘たちのためにマットレスを貸してくれます。私は木の板の上に寝ています。キャンプ内でベッドを 50 ルーブルで買ってそれを手直ししました。それからこの人がもう 2 つベッドをくれました。私たちの皿は全部、この人たちがくれたものです。ロシア災害緊急事態省が支給したストーブはこのガスバーナーと交換しました。みっともない形をしていますが、ここには通気孔も窓もないのでストーブは使えないんです。ここは湿気がとても多いんです。外が雨だと内側の壁が濡れます。ゴキブリやネズミもうようよいます。」

・ルイーサ(39 歳)ーアルチエホ:雨漏り

ここも難民たちの住まい(としておきましょう)に改造された農場の一例です。ここには土間式の建物が 3 つあります。屋根は手直しが必要で、立ち並んだ部屋はゆがんでいます。壁はダンボール、毛布、ベニヤ板、ビニールの組み合わせです。この場にプライバシーはありません。隣人がラジオを聞いています。子どもが泣く声があります。どこかでテレビのボリュームが上げられています。こうした騒音が建物のすみずみに響き渡ります。

「ここで 3 度目の冬を過ごします。着いた当初は何にもなくて全部自分たちで造ったんですよ。でも雨漏

りは止まりませんし、トイレはとてひどくて汚物でいっぱいです。着いた当初からそんな風で、トイレの数はこのキャンプ全体で7つしかありません。人道援助団体は次から次へと視察に訪れますが、約束はしても2度と戻ってはきません。以前はロシア災害緊急事態省が温かい食事をくれたんですが、それも春にはなくなりました。デンマーク難民協議会が食糧をくれ、赤十字からはバケツとストーブの支給がありました。でも毛布とマットレスは足りません。」

■恣意的な援助差し止めが行われています

ロシア大統領にチェチェン人権問題担当官として任命されたウラジミール・カラマーノフは、昨年11月19日、チェチェン難民の窮状について話し合うEU代表団を前に、難民に「危機的段階が訪れ」つつあると述べました(出所:タス通信)。破れたテントは取り替えられぬまま、深刻な食糧不足は危機的レベルに及び、一人一人に割り当てられる食糧がごく少ない、といった援助不足の元凶は、省どうしの責任の擦り合いにあるというのが同氏の主張です;それまで難民問題にあっていた連邦省が閉鎖されて内務省がこの問題を担当するようになると、内務省は難民援助という任務の引継ぎに時間を要したというのです。しかしMSFは、難民に援助が遅れている本当の理由が単に外交上や組織上の問題であるという考え方には疑問を抱いています。

2001年3月より、ロシア当局およびロシアの政策を支持する各国政府、そして国連の主要機関は、同年の夏の間、自国へ帰還するよう大部分の難民に呼びかけました。ロシア災害緊急事態省がチェチェンでの家屋再建に取り組み始めた一方、イングーシにおける援助活動の大部分が打ち切られました。今では食糧配給のみが続けられていますが、それもとぎれがちです。ロシア災害緊急事態省は暖かい食事の配給を何の通知もなしに延期し、国際基準でみて(1日あたりの最低摂取量は2100カロリーと定められています)質量両面で劣る代価品を支給しています。肉の缶詰も支給されますが、賞味期限が1年も前に切れています。食料品以外の毛布、マットレス、調理用品、暖房設備といった生活必需品は全員には行き渡っていません。援助の調整が何もされていないせいで、配給の実施はあてにならず、最も食糧や薬を必要としている人々を援助できていない結果となっています。

UNHCRは、イングーシからチェチェンへの帰還者より流入者の方が多く、イングーシでこの冬越す難民に対する準備が必要となっている事態をようやく把握しています。UNHCR・避難所担当者はこう語ります。「チェチェンへ帰還予定の難民はほんのわずかです。たとえば先週は150名が帰還しましたが、逆にイングーシへ到着した難民が250名います。この夏、我々は帰還者に対してテントや生活必需品をまとめたパッケージを配る計画でしたが、結局ほんの少しだけしか配らずじまいでした。」しかしUNHCRは6つのキャンプ内(アキユルト、バート、スプートニク、RMO、SMU/ロゴバズ)で最も破損の激しいテント(全部で670張り)をまだ取り替えていませんし、新しいテント(約400張りに交換の要請が出ています)の支給もまだです。一方で、難民が集まり自発的に形成されたキャンプへの住宅の建設計画もまだ進展を見ていません。

イングーシでの受入れ状況

2001年11月、MSFスタッフはイングーシ移民局の担当者に聞き取り調査を行いました。

Q: イングーシでチェチェン難民が抱えている主な問題点は何ですか？

「1番目は生活するスペースが狭い点が問題ですね。難民たちは、キャンプにおよそ3万人、「無断定住地」に3万人強、民間人宅に8~10万人住んでいます。難民を受け入れ始めてから2年がたった現在、難民の家主たちにも問題が及んでおり、家主たちは難民を立ち退きにかかっています。残念ですが、新しいテントキャンプが建設される見込みはありません。UNHCRとは一部の無断定住地に数千人の難民用のスペースをつくるという点で合意しただけです。」

Q: なぜ現在新しいキャンプが建設されないのでしょうか？

「政治上、財政上で問題があるからです。キャンプの建設計画といったことを承認すれば、連邦政府が政府として脆弱である点や、チェチェンでの生活状況を向上させていない点などが露呈してしまうことになります。それに新しいキャンプはすぐには建てられません。国連でも2つのキャンプを完成させるのに4か月かかっています。2番目の問題は冬じたくです。半分のテントはボロボロで今すぐ取り替える必要があります。3番目の問題は、保健省がらみのものです。医者と薬が足りていません。食糧はNGOのおかげでなんとか足りています。いつも同じ物ばかりではありますが、難民たちが市場でなんとか別の物と交換できています。」

Q: 家主が住人である難民に立ち退きを要求しているというのはどうしてですか？

「イングーシ人の家主たちは、何の援助も受けていないんです。難民を受け入れている家族はスイスの団体からは100ドルずつもらっていますし、またデンマーク難民協議会も少し援助していますが。中心となっている問題は、水道代、ガス代、電気代が家賃と別になっている点です。イングーシ共和国ではこうしたものをロシアから買っていますが、支払いができないと全部止められてしまいます。この点をめぐってはさまざまな議論がなされていますが、決着はついていません。」

3.新しい難民登録の拒否

国境なき医師団(MSF)は、チェチェンから最近やってきた何万もの難民の要求に対し、自分たちの力が及んでいないと感じています。こうした難民たちは「無断定住地」に生きのびる場を見出すことが多く、ほとんど援助を受けていないも同然です。人々はチェチェンでの日常的に脅かされている暮らしを逃れ、ただただ生き延びる手だてを探している状態にあります。イングーシに暮らす難民は悲惨な状況にあり、難民としての登録を閉ざされたまま援助も受けられず、脅迫に苦しんでいる状態です。これではイングーシへやってくる難民の数ももう増えなくなるでしょう。

■難民の流出が続いています

難民はチェチェンへ帰還し始めると考えた人も一部いましたが、現実にはそれとは逆の現象が起こりつつあります。戦禍を逃れなんとか自分やその家族と生き延びようと、チェチェンから避難場所を求めて一般市民がイングーシへ流入する事態が続いています。こうした流れは2001年7月にセルノボツク、アシノフスカヤにて浄化作戦が再開してから続いており、9月中旬にヴェデノ、シャリ、イトウムカリ、アルグンといった山岳地帯で爆撃が再開されてからはとりわけその数が増えています。しかし、難民たちは週に1200人の割合で新たに流入していますが(イングーシ移民局の統計による)、その難民たちにとってはイングーシのどこに生活の場を見出すかが頭の痛い問題となっています。登録にからんだ複雑な問題は別として(以下参照)、難民家族には安全な場所を見つけることが何より大切です。金が一応出せるのであれば、家賃は高いですが下宿をを探せばします(1部屋の家賃は1000~3000ルーブル=35~100USドル、これに対しモスクワで小さなアパートを借りた場合家賃は月に200~250USドル)。運がよければ新しい住居へ移る難民からテントの半分のスペースを買うことができます。現にチェチェンへの帰還者の中には、自分たちの部屋やテントを新しい流入者に売っている者がいます。しかし金のない難民の場合は、イングーシの親戚を頼るのが的策です。ひょっとするとそのうち「無断定住地」が見つかったり、キャンプ内に自分の住まいを建てられるかもしれません。ただ、どこも空きがないというのもよくあることです。越境したチェチェン人たちの多くは、しばらくは親戚の家に身をよせますが、場所が見つけれないとなるとそこも離れています。

これまで当局では新しい難民キャンプの建設を阻止するような指導が行われてきました(「2.最低限に控えられた援助／イングーシ移民局担当者への聞き取り調査」を参照のこと)。そのうち現在進められている点がいくつかあります。例えば、チェチェン政府は人道援助の補助を受けようと難民たちを帰還させたがっています。ロシア当局でもチェチェン情勢が落ち着いていることをアピールし、難民が帰還することを望んでいます。イングーシ当局では、新しい難民プロジェクトには制約を課しています(例えば当局はマルゴベク、ナズラン、スレプトスカヤの各市でこれ以上テントや難民用の部屋が増えるのを嫌

がっています)。難民の数が増えたこうした町で緊迫感が高まっているため、というのが当局の言い分です。

新しい流入者の未登録—証言

・イングーシ移民局担当者

「公式な難民数は 15 万人となっていますが、半年前からは難民の登録が中止されているので、その数字より多いことは間違いありません。登録が延期されたのは、チェチェン政府がイングーシ政府に対し、資金面で難民の引き受け体制が整ったと言ってきたからです。チェチェン政府では難民たちが帰還するものと思っていましたし、チェチェンでの生活状況が今後改善されるとも語っていたのです。(正式登録されない難民たちは) NGO 団体から人道援助は受けられますが政府からの援助はなしです。つまり、パンの 1 日おきの配給と、われわれ移民局による 1 日 15 ルーブルの支給は受けられません。」

・ナターシャ(43 歳)—スレプトスカヤ

ナターシャの夫は病気で昨年 4 月に亡くなっています。残された彼女は、19、18、16 歳の息子と 15、12 歳になる娘といった年頃の 5 人の子を養っています。以前から貧しい家族でしたが、今ではすっかり無一文になってしまい、隣人やキャンプの監督者、そして他の者たちに完全に頼る生活です。現在はスレプトスカヤにあるラスベトキャンプのテント内に身をおいているナターシャですが、いつホームレスに身を落とさぬかと、常に心配しています。

「娘 2 人にやれるベッドもないありさまなんです。9 月にアルハンカラから着いた後、私はあちこち行きましたよ。アリーナ、スポーツニク、サチータってね。でもどこでも空のテントを買わなきゃならない。ここではテントを物乞いをして回っています。ある男性が、チェチェンにしばらく戻るから、場所が見つかるまではテントを半分貸してやると言ってくれました。難民として登録はしていません。どうすればいいのか途方にくれています。ここでどうやって暮していけばいいものか見当が付きません。」

・スルタン(45 歳)—カラブラク

チェチェンから新しく着いたばかりのこの家族は、住む所が見つかって運がいいのはいいのですが、無一文にはわかりありません。小麦粉を隣人から借りなくてはならず、初めて食糧援助を受けたときにそれを返すこととなります。すでにここに住んでいる隣人が言います。「デンマーク難民協議会の事務所でも、赤十字の事務所でも、新しい難民が登録を受理されるには 2、3 か月かかるよ。でもその間、どうやって生きていけっというんだらう。」

「私たちはどこにも難民の登録をしていませんので、援助は現在はどこからも受けていません。金が底をついてしまったのでとても大変です。移民局には私たちの名前を出してあります。ここに住んでいた人たちはロシア災害緊急事態省からパンをもらっていました。私たちは事情を話して名前を難民リストに載せてもらうように頼んだんですが、災害緊急事態省からは断られました。今日は 2 人の息子たちと

一緒に畑にジャガイモを採りに行ってきました。」

「ここに来てからは、これまで変なことがいくつか起こっています。ディクニヴェデノにいた時、私たちはデンマーク難民協議会の世話になっていました。その後イングーシへ移った時、私は協議会の事務所に出向いて事情を話し、チェチェン内の難民リストから自分たちを取り除いてこちらのリストに載せてもらえるよう頼んだんです。協議会は私たちを初めのチェチェンのリストからは削除しました。でも次の段階となるイングーシでの難民登録はまだ待っている状態です。今のところは、おかげさまで近所の人たちができるだけのことをしてくれます。昨日も米をもらいました。」

・クジマツ(101歳)ースレプトスカヤ

クジマツはボガティールの小屋の片隅に住んでいます。小さな部屋に窓はありません。壁と床は擦り切れたカーペットで覆われています。一人で眠るのが怖いクジマツの部屋には、金属製の二段ベッドが置かれています。天井にはビニールとダンボールが被せてあります。彼女には皿もストーブもありません。あるのは小さな電気ヒーターだけです。

「普段はデンマーク難民協議会が助けてくれていますけど、リストからはもう3回も外されました。それで3ヵ月は何ももらえませんでしたよ。おかげさまで近所の方が夜には食べ物をくださいましてね。パンを外で焼いています」。

■登録中止のせいで把握できていない難民がいます

2001年2～3月以降、難民の正式登録が延期されています。そのため新しく流入した難民たちはリストになく「存在しないもの」となっています。MSFの病院を訪れる女性たちの話では、当局はイングーシ領内で生まれた子どもの登録を拒否しているとのことでした。

正式な難民登録がされなければ、1日にどれほどの難民たちが到着しているのか、その数を把握することができませんし、人道援助プログラムに大きな障害となるのも明らかです。現に、難民人口を完全に把握した調査がないせいで、およそ2～5万人の難民は存在しないものとみなされています。正式に登録された難民数は15万人となっていますが、実際の数には17万とも20万とも推定されています。

こうしたリストに正式に登録されていない難民たちはロシア災害緊急事態省の援助を受けることができません。この省は難民への総合的な食糧配給を第一の任務としている機関です。NGOにもそれぞれ手持ちの援助者リストがあります。それでも、難民数の徹底的調査が行われていないせいで、不完全なリストをもとに援助計画を行わざるをえない点は変わりません。

■難民に対し帰還の圧力がかかっています

2001年に入ると、ロシア当局はイングーシ内の難民へじかに圧力を強めたり、チェチェン援助費を改ざんした報告書を出すようになりました。チェチェン政府でも難民委員会の代表者が2001年春から夏に

かけて各キャンプや無断定住地を訪れ、難民に対しチェチェンへ帰還するよう呼びかけました。その際政府は様々なことを難民に約束しました。証言によってばらばらですが、避難所の確保、家屋の建設材、テント、食糧、金(一括 2000 ルーブル、または 1 日に 50 ルーブルずつなど)、破壊された家屋に対する補償などです。

いずれにせよ帰還の圧力が難民にかけられました。バートキャンプのタイーサ(32 歳)によれば、2001 年春に男たちが訪れ、テントもろとも「追い出されて」、チェチェンに送り返される前に今すぐ帰還するよう告げたということです。ナシコルトのルイーザ(34 歳)は、地方の役所の代表に立ち退かなければガスも電気も切ると脅されています。

チェチェン内のアルグンの街では、一部の家屋が再建されて人々が帰還しましたが、この数カ月にわたって激戦が続いています。証言者の話では、いったんはアルグンに戻った家族たちも数カ月滞在後にはまたイングーシへ戻ったということです。

ロシア政府はチェチェン難民を自国へ帰還させたがっています。しかし、大規模な戦闘の再開、浄化作戦の続行、そして冬の到来など、多くの点で帰還への望みはかき消されてしまっています。MSF スタッフがチェチェン難民に「帰還する際に何が一番心配か」と尋ねると、何より先に家族の安全を挙げてきます。これは暴力行為が無差別に行われていることを身に染みて知っているからです。またそれ以外に気がかりなのは、チェチェンには生き延びるのに最低必要な物資が手に入らないのではないかとことです。約 80 人の難民に「チェチェンへ帰還したいか」と尋ねたところ、回答は「帰りたいのはやまやまだが今は無理」あるいは「帰りたくない、治安を考えると今チェチェンに住むのは無理」の二通りに分かれています。

帰還への圧力

ーチェチェン政府・難民委員会の代表者に聞く

「難民の帰還はチェチェン政府にとって最も重要視されています。グロズヌイ、グデルメス、ウルスマルタン、アチホイマルタン、アルグンでは、まだ住むことが可能な家屋が修復されてきました。このうちアルグンでは総勢 355 人の子どもが通える 2 つの幼稚園と 500 人を収容できる避難所ができ、避難所にはすでに 474 人が移ってきています。ズナーメンスコエでは 2 つのテントキャンプを建設中ですし、セルノボツクとアシノフスカヤでは無断定住地の修復にあたっているところです。」

「委員会には『チェチェン人の帰還と再定住』を特別に扱う部門があります。5 人のメンバーがイングーシの各市町村に散らばる難民たちを地域別に分担し、難民に会って状況を説明したり、相談にのったりしています。チェチェン帰還したい場合はそのリストに載せ、帰還依頼書を書いてもらっています。すでにグロズヌイには 4000 人が帰還予定で、さらに 1800 人が帰還を望んでいます。アリーナ、ベラ、バートなどのキャンプにいる難民は、多くがキャンプで冷たい風にあたりながら冬を過ごすのを嫌がって

います。帰還民が毎週1度、軍に守られながらアルグンまで護送されています。3カ月の間に12回の護送がありました。」

Q: 難民たちによれば、安全の点からまだ少々問題があるということですが…

「確かにそうです。チェチェンが絶対に安全であるとは断言できません。わが身が無事でいられるかすら定かではないんです。」

Q: 危険だとわかっていながら、どうして人々の帰還を後押ししているんですか？

「この数日間に40万人の児童たちが学校に行くようになりました。人々はチェチェンで自分たちの生活を送っています。ここのテントで暮らすのはもうんざりなんですよ。難民たちは帰還を待っています、帰還したがっているんです。こちらから難民を無理に戻しているなんてことは全くありません。」

Q: 繰り返しになりますが、現在のような情勢にあるチェチェンに人々が帰還するのは危険ではありませんか？

「チェチェン人は1人残らず帰る必要があります。私たちは自分たちで自国の問題を解決しなければなりません。」

Q: 戦争が終わるまで帰還は待つ方がよくありませんか？

「いつ戦争が終わるというんです？ 人々が帰還すれば戦争も終結するでしょう。それとNGOがチェチェン領内で仕事ができるようになり、チェチェンにやってきた外国人が国の状況をしっかり見て、何が起きているのか証言するようになればね。」

その場限りの約束－証言

リダ(57歳)はスレプトスカヤのベラキャンプに住んでいます。「あの人たちったら夢のようなことをいっぱい難民に約束してますよ！家やら食料やら物資やら、こちらが欲しがってるものは全部ね！でも口だけです。」

バートキャンプ(カラブラク)で会ったゼリムハン(15歳)はこの6月、帰還民の避難所が用意されたアルグンに戻った家族のひとりでした。彼は9月にはイングーシへ戻ってきています。「そうなんです。政府は必ず援助するといったけれど、帰還してから4カ月、私たちは何ももらえませんでした。補助金も、家を建て直すための資材もなんにも。ひと月に3度、少し食糧がもらえるだけです。」

4. チェチェン ～柵のない牢獄～

チェチェンではなんの罪もない者たちが毎日のように爆撃を受けたり、十字砲火に巻き込まれたりして、死と隣り合わせの生活をしています。浄化作戦が行われる中で文字どおり「失踪」したり、負傷する者たちもいます。ロシア政府からは「テロリスト撲滅作戦」と称されるこの戦争によって、チェチェンの一般市民はいかなる権利も剥奪され、いかなる援助も断ち切れ、いかなる考慮もなされぬままに虐げられています。

1日1日をしのいでいく、それだけのことがチェチェンでは難しくなりつつあります。外出はその度に危険がありますし、住宅の集まった地域は爆撃や夜間の銃撃戦の標的です。住人たちは多くの時間を地下室で過ごしています。それに人々は、じかに暴力を振るわれるのはもちろんのこと、報酬が悪かったり無かったりする兵士から所有物まで略奪されています。そしてこの兵士たちはといえば、盗みを働きなから何ら罰されていません。

■戦争犯罪と人道に対する罪から逃れて

チェチェン紛争はこの2年の間に激しさを増しています。チェチェン制圧期が終わりにさしかかり、激しい爆撃が下火になっても、チェチェン領内に駐留したままのロシア軍は人々に対し残酷行為を犯しており、占領軍はやりたい放題の乱暴狼藉をはたらいています。グロズヌイ陥落後、チェチェンの戦闘員たちは山岳部へ撤退しましたが、それ以降はゲリラ戦を幾多の町で繰り広げてロシア連邦軍やロシアの政策を支持する各政権を苦しめています。2001年9月にはグロズヌイでカディロフ行政長官が白屋堂々と襲われており、ロシア軍統治下の領内でも不穏な空気の高まりが見られます。こうした紛争激化やロシア軍による抑圧に加えて、一般市民とチェチェン武装勢力の行動が同一視されているため、一般市民からは新たに犠牲者が出る恐れがあります。中でも15～50歳の男性は見境なく暴力を受ける危険があり、より年少の男子にこうした危険が及ぶ場合もあります。そして暴力を受けた男たちは、その結果逃亡したりチェチェン部隊へ加わることを余儀なくされることも多いのです。事態は良くなるどころか悪化の一途をたどっています。2001年9月以降、爆撃やロケット攻撃が再開され、流れ弾を避けようと、多くのチェチェン人が多くの時間をネズミ同然に地下室で過ごすことが多くなっています。恐怖は、チェチェンで日常の一部となっているのです。

ロシア軍は2001年の初頭にはチェチェンから撤退する予定でしたが、チェチェン領内からロシアの駐留軍が減るといった事態はまだ起こっていません。これに絡んで実行されたことといえば、軍が保持していた特権がロシア連邦保安局(旧 KGB)にいくつか譲渡された点だけです。しかしこうした変化のあとも、大規模な人権侵害や人道法に反する行為は続いています。昨年7月に、それまで安全な場所とみなされていたセルノボツクが、国境の近くという理由から攻撃されました。またアシノフスカヤでは、チェチェン人に対する強姦、連行、拷問といった残酷な暴力行為がはっきりと記録されています。海外の通信

社によれば、こうした行為に加えて略奪行為が組織的に行われており、人々は日常的に虐げられています。MSFの医療スタッフも日々の職務の中で、似たような話を耳にしてきました。夜間の銃撃戦、不当逮捕、フィルターキャンプ、組織的な拷問といった形で、ロシア当局はチェチェンを柵のない牢獄、恐怖の無差別暴力のたまり場へと変貌させているのです。

チェチェンでの暴力行為－証言

・スルタン(45歳)－カラブラク

「ヴェデノ地域から3週間前に着きました。移動費と、ここに身を落ち着けるだけの金が充分なかったの
でこれまで来られなかったんです。でもあそこにはもうあれ以上いられませんでした。特に子どもはね。
2週間のうち、娘たち(8歳と10歳)が学校に行ったのはほんの1,2日だけです。次女は2歳半の時に
トラックと装甲車を見て叫びました。『ロシア人が来た、ロシア人が来た!』とね。飛行機をみると泣きわ
めくもこの子です。『地下室へ逃げろ、地下室へ逃げろ!』ってね。…夏からは本当に耐えられない状
況になりました。いつ家に爆弾が落ちてきても、息子のうちひとりが連れ去られてもおかしくない状況で
す。すでに1日のうち多くを地下室で過ごすことが多くなっていましたが、事態は悪化するばかりでし
た。子供たちの脅えはますますつのり、精神的にまいっていました。私はヴェデノの病院の救急部門で
救急車を運転していました。働き続けましたが給料はもらえず、車は分解寸前でした。病院の2つの建
物のうち1つはもう瓦礫の山でしかありませんが、もう1つはどうにかもちこたえて立っています。そこで医
者はいつも目もくれず働いています。ガスはないし、停電が2週間ぶつ通しのこともあります。みんな病院
にはいたがりません。女性は出産したら真っ先に家に帰っていきます。爆弾が恐ろしいのです。医者は
やれるだけのことをやっていますよ。時折、人道援助やら医薬品の調達が少しばかりあります。」

・カバ(38歳)－スレプトスカヤ

「自分の住んでいた建物に入ると、ご近所の奥さんと友達に出くわしました。そこはグロズヌイで最初に
住んでいた建物が破壊された後に私たちが移った所なんです、なんとか建物の半分はもちこたえてい
ます。その奥さんが私を見てあいさつしてから泣き出しちゃいましたね。話では、2日前にロシア語を話
す覆面の男が5人、その人の家にやってきたそうです。ドアを無理矢理開けさせて、旦那さんを殴り始
め、奥さんの宝石を奪った挙げ句に、旦那さんの頭に銃を突き付けて、アパートの他の住民のところへ
案内しろと脅したそうです。それで奥さんは夜中に一階ごとに住人を訪れ、うそをついてドアを開けさせ
られ、その度に住人が受ける恐ろしい暴力を見なきゃならないはめになったんです。覆面の男たちは
金、宝石、貴重品を要求しました。ある部屋の女性は何も差し出すものがなかったせいで、そこにいあ
わせたいところがひどく殴られています。女性が泣いて頼んでも、やつらは言ったそうです。『じゃあ何か
見つけるこった。金はないのか!』」

「この戦争はロシア人にとって金になるんです。どうしてチェチェンから出て行くもんですか。戦争は決し
て終わりはしません。ロシア人はチェチェンで金を儲けてばかりです。検問所なんか、車が1台通るた
びに30、50、100ルーブルと徴収しています。あなた方がお仕事をなさって何か変わるもんでしょうか？」

ダメですよ。どのみち私たちが信じてくれる人は誰もいないんですから。」

・ヌラ(45歳)ースレプトスカヤ

「金曜日に出掛けていった息子が、土曜日には人に連れられて帰ってきました。9月15日の土曜日のことです。その日の朝、息子が牛の世話をしているところに爆弾が落ちたんです。背中にひどい怪我をしました。村人が3人、女性2人と男性1人もその日負傷しています。いとこが息子連れて帰ってきたから、3週間は病院にいました。病院では背中からこれくらい(といて卵のサイズの金属のかけらを見せた)の大きさの金属片を取りました。息子はよくなりかけて、話もできるようになりました。でもそれから食事をしなくなりました。いつも気分が悪くなって、それから死んでしまいました。背骨が砕けてたけど、死ぬことはないだろうと思っていたんです。病人にはなるだろうけど、生きるもんだと思っていたんです。」

・アミナット(23歳)ーナズランのロゴバズキャンプ

妊娠6カ月のアミナット(23歳)はこう語ります。「1週間前にここにきたけど、もう嫌気がさしてるわ！10月8、9日のアルグンでの爆撃はひどかった。その後、ここにやって来ました。あれ以上アルグンにいることは無理だったからです。夫は7か月前に捕らわれました。身分を証明するものが何もなかったんです。それからは何の音沙汰もありません。あの日は装甲車が列になって行進してきました。外にいた夫と夫の友達が怖くなって、近くの家へ逃げ込みました。ロシア軍がそこを攻撃して、何もかも壊して皆を連れて行ったんです。義母のもとを離れたくなかったから一緒にアルグンにいました。お義母さんはアルグンを絶対出たくなかったんです。でも状況はますます悪くなってきました。あそこへはあれ以上いられませんでした。」

「帰還ですって？ ええ、ロシアの軍と連邦保安局、それにロシア軍参謀本部情報総局とその他全部がロシアに戻ったらね」

暴力から逃れてー証言

・ローザ(21歳)ーカラブラク・パートキャンプ

ローザは現在妊娠7カ月で数日前にチェチェンの山岳部からここへ着いたばかりです。

「ヴェデノ近くの山岳部にあるディクニヴェデノという小さな村に住んでいます。10月15日の月曜日、チェチェン政府軍の建物が爆撃され、火曜日には村が爆撃されました。怖くて、走って転んでしまいました。赤ん坊のことが心配になったので父親と車にのってMSFの産婦人科病院に診てもらいにいきました。先月にも診てもらったところ。今回は入院するよう病院に言われました。赤ちゃんの心臓音がとっても弱いんです。初めての子を生んだときは帝王切開でした。」

こんどの出産も、どこでどうやってやればいいのか見当がつかえません。ヴェデノの病院には行きたくないんです。あそこへは誰も行きたくありませんよ。爆撃があつて危なすぎるんです。2週間前、妹と一緒に

に初出産のときの担当医を探しにグロズヌイまで行ったんですが、町中どこを探しても見つかりませんでした。だから、中央産院で12月5日に予定していた分娩手術には行かないつもりです。その点は家族を説得して、それからどこで出産するか決めるつもりです。」

「どうやってあそこで暮らしているかですか？半分の時間は地下室で過ごしています。援助はありません。デンマーク難民協議会が子ども用にと小麦粉と砂糖を少々くれるだけです。村には兵士がたくさん駐留していて、毎日銃を放っています。誰だって市場へ行くのは怖いんですが、ものを売ったり少しばかりのお金をつくるにはあそこしかありません。それしか生き延びる手はないんです。兵士たちは装甲車によってわめきたて、皆を脅えさせています。夜には人家にやってきて食べ物や飲み物を要求してきます。略奪行為や不当逮捕は常にあります。装甲車で兵士がやってきて村を封鎖し、家を一件一件搜索して若い男性を逮捕していきます。男性は連行されたら二度と戻ってきません。」

・シルバン(21歳)ーカラブラク

シルバンはおばのアシアットの「家」でしばらくの間、過ごしています。馬屋の中、修繕された小さな部屋です。ここにはアシアット、アシアットの夫、3人の子どもたちと通常5名の人間が住んでいますが、現在はシルバン、シルバンの母、カミエタ、シルバンの姉妹の1人と、総勢8名が暮しています。そのうち3人は数日のうちにチェチェンへ帰還します。シルバンは冗談で言います。「仕事が終わると2、3日のんびりしに山や海にでかけていたことを思い出すよ。今はここが僕たちの『保養地』だよ！」彼はこのほんの小さな空間をさしてそう言っているのです。部屋の天井にはビニールが留められ、固い地面の上には住人が自分たちでコンクリートを敷きました。部屋の半分をしめる寝台では皆が一緒に眠ります。壁には毛布がかけられていますが、石の壁はほとんどむき出しの状態です。牛の鳴き声が私たちのすぐそばで聞こえます。通路は新鮮な牛の乳と、牛の糞の匂いにあふれています。

「僕はグデルメスのはずれにある小さな村に住んでいます。1か月前には不当逮捕がまだ続いていました。母が泣いてあまりにも頼むので村を出ることに従いました。その数日前に村の人間が数人捕らえられていたんです。13歳と14歳の子どもまで捕らえられました。僕は村を出たくなかった。自分は何も悪いことはしていないし、自由の身だ。ロシア人と戦ったこともない。なのにどうして家から逃げ出さなきゃならないんです？」

「グデルメスは森と大きな道路の間にある。チェチェン武装勢力の攻撃がなくても、武装勢力が森に隠れているからといってロシア軍が毎日のように爆弾を落とします。爆弾は村々や民間人を犠牲にしています。老人や子供は脅えていますよ。」

■現地の援助団体職員と援助活動にとっての障害

人道援助団体でも、これまで職員が負傷したり危害を加えられたりと心配な「事件」が起きています。例えば赤十字国際委員会の運転手は銃で撃たれて傷を負いました。グロズヌイでは NGO の事務所が家宅捜索を受けましたし、赤十字の職員は逮捕されて軍部に囲まれ、手荒い取り調べを受けています。相手がロシア軍であれ、チェチェン武装勢力であれ、人道援助団体にとってはどちらとも危険な存在でないことはありません。各武装グループではさまざまな指導者たちが昨年 9 月 11 日の米国テロを非難しています。しかしあの日以来チェチェンでは、外国人に対してはあらゆる不法行為が許されるといった雰囲気と、テロリスト撲滅を邪魔するものに対してはいかなる処置も全面的に認められるといった空気に包まれ、ジュネーブ条約など無きに等しい状態です。その結果、現地へ職員を派遣できる援助団体はほとんどなくなってしまい、今チェチェンにいる職員に対しても自由な移動や巡回を差し控えるよう指導せざるをえないのです。

5. おわりに

これは二重基準があるということなのでしょう。チェチェン紛争は3年目に突入しましたが、結果的に一般市民に多大な被害を与えている、この残酷極まりない戦いの実態はまだ明らかにされていません。テロリスト撲滅という名のもとにロシア政府がチェチェンの一般市民に対して行った行為には、各国から抗議の声があがっていました。ところが、世界がより緊急を要する政治問題に直面してからは、その声ももうかき消されてしまったかのようです。

イングーシでのチェチェン人の生活ぶりは悲惨さを極めます。しかしそれでも多くの難民たちにとって避難できるかどうかは死活問題に関わります。ある時は寒さの中でネズミ同然の無理な地下室生活、ある時は避難所や援助すらない生活、人々は危険を冒しこうした道を選んでいるのです。今のような情勢ではチェチェンに暮らすのは無理だと思われるからです。

援助を与えなければ難民たちもしかたなく自国へ帰還するだろう。こうした期待のもとに現在のようやり方が取られています、そのやり方は間違いなく失敗しています。難民たちは悲惨で人間的でなく虐げられた状況に置かれ続けていますが、それでも新たな難民流入は止まっています。それに今日のチェチェンを支配している牢獄同然の危険な状況や、いつおこるやもわからぬ暴力を考えれば、難民たちは誰も自国へ帰りたがりません。

チェチェン人出国の実態、そしてイングーシのチェチェン難民の正確な数を把握する必要があります。それでこそ、難民のもとへ適切な援助を十分に届けることができるでしょう。

6. 付録: チェチェン、イングーシにおける国境なき医師団の活動

2002年1月、欧州議会にてロシアとの紛争が続くチェチェンにおける一般住民の保護の可能性についての議論が交わされました。国境なき医師団(MSF)はこの報告書をもとにチェチェンの窮状を証言しましたが、結局議会はこれらの事実を前に、ロシア政府に対し「欧州議会参加各国との協調を求める」という曖昧な言及をするのみに甘んじ、非難や処罰を差し控えました。MSFは基本的人権を踏みにじる政策を是認するようなこの欧州議会の対応に失望と非難を表明しています。いかなる国際機関もこの状況を改善する策を見出せず、また見出そうともしていないのです。

チェチェン、イングーシにてMSFは以下の活動を展開しています(2001年11月現在)。

■チェチェン

2001年1月以来、MSFはイングーシのナズランを拠点とし、チェチェン領内の医療施設を援助しています。

・医薬品、医療機器の提供

MSFはグロズヌイ中央産院、セルノボツク病院、シャトイ病院、トラン(Train)およびテキシニクム(Texnikum)両国内避難民キャンプ内診療所2カ所、シャロイおよびイトウムカリの全医療施設に物資を提供しています。また、シリユルト病院、スタリアタギ産院、グロズヌイ病院といった新しい施設にも援助を行っています。

・施設の再建

2001年9月、MSFは紛争勃発以降ロシア軍兵士で溢れる既存のシャトイ病院に代わり、新たに病院としての使用が予定される建造物の再建を開始しました。またシリユルトでも再建工事を行っています。

・衛生面の改善

セルノボツク、アシノフスカヤ両キャンプにて、トイレの設置、衛生用品やポリタンクの配布などの衛生対策を行っています。

・MSFが援助している人々の総数

セルノボツクにて約7千人、シャトイ、シャロイ、イトウムカリ 各地域合計で約1万2千人が医療援助を受けています。またセルノボツク、アシノフスカヤ両地域合計で約7千人、シャトイで約1万2千人が物資援助を受けています。

■イングーシ

・医療施設

MSFはスレプトスカヤ、カラブラク、ナズランの3カ所にクリニックを設置し婦人科診療を行っています。

またこれらのクリニックで診察を受けた女性の搬送先となっているスレプトスカヤ産院、ナズラン産院に医薬品と医療機器を提供しています。

・施設の再建、衛生対策

MSF は 2001 年春より、難民が集まり自発的に形成されたキャンプ 15 カ所前後にて援助活動を行っています。寒気や湿気を防ぐため住居の屋根修理を行い、毛布、シーツ、マットレスを 1 万 9 千人に配給しました。さらに無断定住地など最もひどい環境にある地域では、1 万 3 千人を対象に住居内の改修工事(部屋の増築、仕切りの設置、暖房器具の配給など)が行われました。またトイレやシャワーの設置、水道設備の修理など、衛生設備の改善も実施しました。

・MSF が援助している人々の総数

約 2 万 4 千人が医療援助を、約 1 万 8 千人が物資援助を受けています。

■その他

- ・ ナズランにて結核患者への援助を検討しています。
- ・ インゲーシ北東部のマルゴベクでも 1 万 2 千人の難民を対象にクリニックの運営や物資の配給を行っています。
- ・ ダゲスタン共和国内のチェチエン国境に隣接した地域でも医療援助活動を行っています。